事例No.	3199
公表年度	R6
団体の属性	町村
団体名	島根県奥出雲町

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・移住定住 ・人材確保・育成

事例種類	人材確保・育成

事例内容・タイトル

体験型お試し移住～二地域居住

出典

地域づくり人材の養成に関する調査研究会（令和6年度第３回報告書）

事例３　島根県奥出雲町（体験型お試し移住～二地域居住）　その１

団体	島根県奥出雲町
外部人材	富永千春氏（（神奈川）派遣看護師/（島根）アルバイト）　※外部人材：自治体（地域）外から地域づくりに携わる人材
外部人材活用の分類	□①活動局面を限定（例：研修講師等）　■②継続的な関わりを持ちながら活用（関係人口化）　□③内部人材化（移住･定住）し、活用
活動範囲	■所在市区町村内全域　□所在市区町村内一部地域　□複数市区町村　□その他
活動の頻度、期間	滞在型しまっち！サポーター（７～９月の３ヵ月）：６４時間/月の地域活動、おくいずも未来会議、金吉屋大作戦：毎月第2木曜日
人材支援制度の活用	■有　□無【滞在型しまっち！サポーター（３か月間の滞在型地域活動参画事業）】
キーワード	＃しまっち　＃短期お試し滞在　＃おくいずも未来会議　＃お試し移住　＃金吉屋大作戦　＃スローハウス　＃まちあかり　＃グラフィックレコード ＃二地域居住　＃ひと図鑑　＃じぶんごと　＃関係人口　＃地域おこし協力隊　＃スロハ　＃ゲストハウス　＃関係人口　＃イラスト　＃副業･兼業

◎概要

令和５年12月「おくいずも未来会議」が発足。2030年に多様な人々が集う元気な町を目指す、地域課題の共有と解決策を住民と行政が共に考える場である。現在、町外の活動者や興味を持つ人々も参加し、関係人口の拡大に寄与している。富永千春氏は、縁もゆかりもなかった奥出雲町で滞在及び地域活動に参画。町の地域おこし隊員の話がきっかけで、二地域居住に至る。首都圏とは異なる「無償の優しさ」に溢れた生活が富永氏の心を動かし、得意なイラストを活かした「奥出雲ひと図鑑」の企画へとつながる。この試みを「おくいずも未来会議」で提案・発表し、現在も企画が進行中。

■活動開始に至る背景①「しまっち！」

○公益財団法人ふるさと島根定住財団が運営する「しまっち！（しまね関係人口マッチング・交流サイト）」は、令和６年度から奥出雲町の三沢（みざわ）地区、隣接する安来市の比田地区で短期のお試し滞在（滞在型しまっち！サポーター）を開始。富永氏を含めて３名が参加。

○「滞在型しまっち！サポーター」の対象は45歳未満の島根県外在住者、住民票の移動は不要。令和６年６～９月のうち１～３か月滞在。１か月間あたり64時間以上の地域で取り組まれている各種活動への参画が指定されているが、そのほかは自由。活動費として月９万６千円が助成され、副業可能なため、移動販売や野菜の収穫の手伝いで副収入を得ることも可能。以上の規定はあるが、もろもろ要相談で柔軟に対応。

事例３　島根県奥出雲町（体験型お試し移住～二地域居住）　その２

■活動開始に至る背景②奥出雲町の地域特性

○島根県の地域性として、「共助」や「住みやすさ」がある。令和元年に奥出雲町三沢地区の唯一のスーパーマーケットであったJAの店舗が閉鎖し、高齢者福祉などに携わっていた地元の有志が手探りで菓子類や調味料の訪問販売から始め、「ともに助け合う地域の仕組みをつくる」をモットーにした「NPO法人ともに」の「ともにマーケット」が開店したのは令和３年のことだった。そこから「ともに食堂」（金吉屋内で週２回のランチ営業）や移動販売車で移動販売と見守り活動を行う「ともに号」が誕生した。隣の雲南市は「コミュニティナース発祥の地」であり、雲南市や奥出雲町では人と人とが互いにしっかり結びついている（奥出雲町）。

■活動開始に至る背景③「おくいずも未来会議」

○糸原保町長は、奥出雲町の将来を見据え、「若い人を集めた会議」を発案。令和５年12月、奥出雲の「新しい未来をつくる」「次世代にバトンをつなぐ」を合言葉に「おくいずも未来会議」が立ち上がる。①テーマごとに町長に政策提案してもよし、②自分がやりたいことを発表し、実践してもよし、の２本柱で活動し、あくまで行政は後押し役である。

○令和５年度は、『おくいずもの未来をつくるシティプロモーション事業「ブランドメッセージプロジェクト」』として、メンバーで奥出雲の魅力が伝わる未来に向けてのブランドメッセージをつくり、住民の皆さんが投票できるよう総選挙を実施し、「大切なものほど奥にある。奥出雲町」にブランドメッセージが決定した。令和６年11月現在、会員数は約40名。富永氏も、お試し滞在が終わった令和６年９月から参加。

■本件に関わるきっかけ

○令和５年８月、東京で開かれた医療系の集まりに参加した神奈川県在住の訪問看護師の富永氏（外部人材）は、奥出雲町三沢地区の地域おこし協力隊員・安田彩夏氏（理学療法士）の体験話を共感をもって聞いていた。令和６年４月、ふと「三沢は、町のモチベーションが自分の熱量になる」という言葉が思い出され、ネット検索すると「しまっち！」の滞在型プログラム募集と4月末の締切が目に飛び込んできた。安田氏に問い合わせると三沢地区にあるゲストハウス（SLOW HOUSE@okuizumo：愛称「スロハ」）の改装工事をしながら泊まれると聞き、迷うことなく応募のボタンを押した。

事例３　島根県奥出雲町（体験型お試し移住～二地域居住）　その３

■活動内容①（滞在型しまっち！の２か月間）
○得意のイラストでゲストハウスの見学会パンフを作り、壁の補修やペンキ塗りなど改装の作業にあたっては地域の人々が仕事の合間を縫って「てご」しに来てくれた（てご＝手伝い）。奥出雲町の飲食店・小売店のイベント「かぶりもの巡り」では、笑いを誘う着ぐるみ姿で初めての司会を務めながら踊り歩いていた。都会では目にしたことのない長唄の盆踊りを経験。「みざわ十七夜ばやし」に篠笛で参加。移動販売車「ともに号」に同乗し、地域の高齢者の見守りの手伝いをしているうちに、逆に腰をかがめて乗り込んでくる高齢者が自分のことを見守ってくれているような優しさが伝わってきた（富永氏）。
○三沢地区のゲストハウスに７～８月の２か月ほど滞在しているうちに三沢の夏祭「みざわまちあかり」で「一人一人のわくわく感」が伝わり、ゲストハウスの準備で「地域で地域のにぎわいを作る気概」を感じ、地域の魅力に惹きつけられてしまう。滞在中にゲストハウスの改修が終わり、９月のグランドオープンを前に地域の人から空き家になっていた元「もりわきや呉服店」を紹介してもらい、引き続き滞在することとなった。ただし、現在は冬場の寒さからの退避と逆出稼ぎを兼ねて地元・神奈川に戻る二地域居住中である（富永氏）。

■活動内容②（「滞在型しまっち！」以後）
○「ひと図鑑」をテーマにおくいずも未来会議を開催した際、得意のイラストを活かして「グラッフィックレコーディング（会議の進行とともに誰もが分かるように絵や図形のグラフィックを用いて示す手法）」を初めて行い、奥出雲のキーパーソンや関係人口をまとめた「奥出雲ひと図鑑」のグラレコを作成。現在、そのプレモデルを作成している段階であり、随時、奥出雲町の移住定住支援サイトで図鑑をアップし、２～３年かけて10人、20人、30人と増やし、最終的には冊子にする予定。
○じっくり時間をかけて、いずれ島根に移住できればと思っている（富永氏）。

■今後の課題と展望
○中長期（１～２ヵ月滞在）で滞在できるよう、仕事（農作業や飲食店、温泉施設など）や住宅（シェアハウスなど）があるとよい。長期滞在でこそ地域の魅力を知ることができる。
○二地域居住をしているため、交通のための費用（レンタカー代）がかなりの負担となっている。低価格で使用できるレンタカーなどを含め費用に対しての支援を望む。